

日本宋代文学学会 第11回大会

プログラム

日時:2024年5月18日(土曜)9:20開場、9:50開始

場所:明治大学 駿河台キャンパス (会場未定)

大会参加費:1,000円

● 午前の部 9:50~12:10

9:20 開場・受付開始

9:50 会長開会あいさつ 九州大学 東英寿

主催校あいさつ 明治大学 甲斐雄一

【I】10:00~10:30 曾鞏〈南軒記〉〈學舎記〉中窮獨而安的個人空間書寫

台湾大学研究員 (PD.) 吳潔盈

(司会) 相模女子大学 加納留美子

【II】10:30~11:00 晩年の張耒と「和陶詩」

金沢大学 原田愛

(司会) 帝京大学 陳佑真

—休憩 11:00~11:10—

【III】11:10~11:40 士人と「義」——楊万里の墓誌銘について

大阪大学博士後期 岑天翔

(司会) 東洋大学 坂井多穂子

【IV】11:40~12:10 干謁の意義— 南宋江湖詩人の矜持と職分 —

慶應義塾大学 (非) 阿部順子

(司会) 明治大学 甲斐雄一

—昼休み 12:10~13:30—

● 午後の部 13:30~17:30

【V】13:30~14:00 方回《瀛奎律髓》律詩格律的規範與意義

台湾大学博士後期 詹卉翎

(司会) 神戸大学 早川太基

【VI】14:00~14:30 詞の「豆」に関する一考察—データベース活用の試み

大阪大学博士後期 張亜琳

(司会) 岡山大学 藤原祐子

—休憩 14:30~14:50—

JSPS 科研費 22H00644・基盤研究 (B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催

「日本宋代文学学会」共催

【VII】14:50~16:30 **第3回 宋代書簡シンポジウム**

総合司会 九州大学 東英寿

ファシリテーター 大阪大学 林暁光

①宋代尺牘編集與文學觀念 台湾大学博士後期 介志尹

②宋元啓劄類書的分類與應用 台湾大学 余筠珺

③書簡與旅路—北宋文人的寄書、得書與留書 東華大学 張蜀蕙

④宋代の「書」再考—劉克莊の書信を手掛かりとして— 大阪公立大学 平田茂樹

—総合討論—

—休憩 16:30~16:40—

総会 16:40~17:30

● 懇親会 18:00~20:00 (会場未定)

● 発表要旨 ●

【I】曾鞏〈南軒記〉〈學舍記〉中窮獨而安の個人空間書寫

台湾大学研究員 (PD.) 吳潔盈

在宋仁宗嘉祐二年（1057）進士及第以前，曾鞏（1019-1083）因為父守喪、操持家業與休養身體之故，於故里南豐耕讀近十年之久。這期間，他在家宅之旁得一地，於是建一草舍，以為個人讀書休養之所，復在至和初年（1054）為該草舍撰〈南軒記〉、〈學舍記〉二文。由於上揭二篇文章的書寫對象是同一個空間，「南軒」即「學舍」，且無論就書寫手法，還是內涵、情調、精神層次而言，都是「互補互益」的關係，故歷來被視為是可以相互參看的姊妹篇。值得注意的是，這草舍雖然既卑且隘、毫不起眼，曾鞏卻在同一年為它寫兩篇文章。其價值何在？以此為開端，本文擬從以下三個層次進行研討：其一，探索曾鞏設置私人讀書與藏書空間以自進的意義，並與他這時期前後的相關詩文作品，譬如書信、贈序以及詩〈豪杰〉、〈讀書〉和〈南軒〉等相參照，說明曾鞏在父、兄相繼離世，獨力持家等人事變遷對他造成的打擊與影響，物理與際遇之「窮」讓曾鞏更渴望以方寸之地建構讓內心獲得「安」與「樂」的所在；其二，進一步論述曾鞏的心理狀態，與當時北宋士人精神特質，特別是理學對於「孔顏樂處」的思想倡導之間的聯繫；其三，根據上述所得，導出曾鞏為此撰寫二文的原因，並且說明其對於個人空間書寫的影響。

【II】晩年の張耒と「和陶詩」

金沢大学 原田愛

北宋の張耒（一〇五四～一一一四）は蘇門四学士の一人で、最も長生きした人物である。彼の晩年の詩の評価は、「作詩晩歳亦務平淡、效白居易體、而樂府效張籍（詩を作るに晩歳も亦た平淡に務め、白居易体に效ひ、而して樂府は張籍に效ふ）」というものであるが（『宋史』張耒伝）、師の蘇轍（一〇三九～一一一二）は、紹聖年間（一〇九四～九八）の張耒について「張十二「病後詩」一卷、頗得陶元亮體（張十二の「病後詩」一卷は、頗る陶元亮の体を得たり）」とも評している（『欒城先生遺言』）。

こうした張耒の陶淵明および白居易の受容は、いかなる経緯や関連性を持って行われたのか。これまで張耒の白居易受容については幾つかの研究において言及されたが、蘇轍の述べた陶淵明受容については論及されてこなかった。また、この頃に蘇軾（一〇三六～一一〇一）・蘇轍によって促された蘇門の「和陶詩」創作も張耒に影響を与えたと考える。

発表者はこれまで蘇門における「和陶詩」受容を論じてきたが、本発表では、張耒の「和陶詩」受容と一連の創作の実態を明らかにした上で、蘇門の師承関係の一端を考察したい。

【Ⅲ】士人と「義」——楊万里の墓誌銘について

大阪大学博士後期 岑天翔

北宋士大夫とは異なり、南宋士大夫は長期にわたって故郷で暮らすようになり、郷里との結びつきが密接となる。楊万里もまた、かかる南宋の「郷居士大夫」を代表する人物であり、待闕・奉祠などのため、故郷である吉州吉水県の農村に、合わせて二十年以上にわたって退居生活を送った楊万里は、吉州の在地士人たちと交遊し、彼らのために多くの墓誌銘を執筆している。本発表では、これら墓誌銘テキストの読解・分析を通して、次のような点を明らかにしたい。

楊万里は墓誌銘を執筆するに際して、墓主である士人の社会救済・社会貢献などの功績を強調して述べている。このような功績について、楊万里は「慈善」や「福田利益」などの仏教用語ではなく、儒家の「義」を用いて評価している。また、その「義」を「天から与えられた道徳的本性」と位置付けている。これによって、在地士人の社会的営みは儒学＝南宋理学の道徳体系に組み入れられていったのである。楊万里の墓誌銘は、吉州地域において「郷論」としての機能を果たしており、それに伴って彼が説く「義」も吉州の基層社会において広く認められていったのであろう。

【Ⅳ】干謁の意義— 南宋江湖詩人の矜持と職分 —

慶應義塾大学(非) 阿部順子

南宋中末期(12世紀末)に出現した「江湖詩人」は、各地を周遊しながらその地の高位高官に「謁見を^{もと}める」、いわゆる「干謁」を行ない、その際に自作の詩を献呈して、詩の代価として高位高官から経済的な援助を得るといった生活様式を採っていたことで知られている。

この江湖詩人たちは南宋滅亡(1279)とともにほぼ消滅した。次代の元代から近年に至るまで、後代の正統派士大夫また近現代の知識人にとって、南宋の江湖詩人はその「干謁」という生活様式によって侮蔑と軽視の対象であり、その詩もとかく低く評価されがちであった。20世紀の末に至って、ようやく江湖詩人に関する専門的な研究が発表されて「江湖詩人研究ブーム」を巻き起こし、その流れは現在に続いている。

しかし、江湖詩人とその詩に関する研究の前提的な視点は、いまだに中国古代の正統派士大夫的文学観、あるいは現代のエリート知識人的価値観に、無意識的に置かれることがなおいかに思われる。本発表は、「江湖詩人」自身が、自らの存在をいかに自己規定していたのか、また自らの存在意義・存在価値を奈辺に認めていたのかについて、考察を試みようとするものである。

【V】方回《瀛奎律髓》律詩格律的規範與意義

台湾大学博士後期 詹卉翎

從唐初到宋末，近體詩格律呈現持續變動、逐步凝定的發展軌跡。作為宋末文人的方回，對於律詩體裁的規範理當有所認識，然在《瀛奎律髓》內，方回卻不全然依循宋代格律條件分判「律詩」，箇中原因值得深究。本文以此為出發點，比較方回所選詩作的格律，析得書中有「採用宋代規範」、「回歸作者時代」以及「朝向古體偏移」三種格律準則。其中「朝向古體偏移」最為特殊，方回不僅允許使用前一階段的格律規範，更提出「唐律之祖」一說，以初唐格律為基礎，進一步放寬要求，即使黏對有所犯病，只要拈二合格率大於零，便有可能被判定為律詩。據本文考察，這種界線的游移主要被應用於與江西詩風相近之作，顯示方回對詩派的改造，除現有研究所言審美理念的調整與宗派譜系的建構二面向，更有格律層面的思索。方回透過擴展「律詩」範圍，納入更多符合江西詩格的作品，以詩體界線之重定作為振興詩派的另一取徑。

【VI】詞の「豆」に関する一考察—データベース活用の試み

大阪大学博士後期 張亜琳

韻・句・豆は、現代最も一般的に用いられる詞の句切り方である。しかし、句の下位単位である「豆」は宋代の文献には見えず、明清時代の詞譜学の発展に伴って見られるようになる。明代の詞譜において「豆」に対する理解は様々であったが、清代になるとある程度共通した概念が確立され、広く受け入れられるようになり、現代に至るまで詞のテキストの形態に大きな影響を与えている。明清詞譜学の影響を受けた詞のテキストにおいて、「豆」句は具体的にどのような形をとり、またどのような特徴を持っているのか。特に、しばしば「句」、すなわち「，」で区切られた三言句と混同されやすい「三字豆」句は、果たして三言句とどれほど異なるのか。こういった疑問をより明らかにしていくのが、本研究の目的である。

これまで、詩句の研究に比べ、詞句に対する研究は不十分であるように思われる。その理由として、詞句の形式が不揃いであることが挙げられよう。そこで発表者は、句を単位とした詞のデータベースを考案した。『全宋词』から作品数が多い詞人の作品を選び、韻句ごとに分割した上でその形式を整理した。このデータベースを活用することで、「豆」のある作品やその詞調、作者などの情報が一目瞭然になると同時に、句の内容やよく見られる形式に関する有益な観察と分析も可能となると考えられる。

【VII】第3回 宋代書簡シンポジウム

【VII-①】宋代尺牘編集與文學觀念

台湾大学博士後期 介志尹

尺牘勃興於宋代，是文學史上一個重大的現象。本文以編纂與結集的角度，探討該現象。目前學界對明代以降的尺牘編集有豐厚的研究成果，卻未針對宋代各類書籍進行全面考察，討論時段亦大體限於南宋。本文上溯北宋，分別梳理總集、別集及尺牘專集三類書籍，各自收入尺牘的時間、編纂形式與理念。以上述梳理為基礎，復以宋人筆記檢視時人如何閱讀尺牘。

初步結論如下：總集中的尺牘，以啟的附屬文本被一併收入，作為應用性寫作的範文。北宋後期的別集，開始全面收集著名文士的尺牘，但始終將尺牘置於正集之外，顯示尺牘仍是一種邊緣的文體。蘇軾、李之儀等人的尺牘獨立成集，則反映宋人文學鑑賞的眼光，甚至如孫觀的尺牘集還附有詳密的註釋。但整體而言，著意經營或鑑賞尺牘文字，在宋代並未形成風尚。宋人閱讀尺牘，主要是從中獲悉知識故實、臧否議論，及領略前賢的行事風範。比起正式的文章，尺牘作為私人通信，傳達作者更真實的議論與行動。

【VII-②】宋元啟割類書的分類與應用

台湾大学 余筠珺

「啟割類書」作為交際的應用類書，為了配合各種書簡的使用場合與對象，發展出以「事實」、「活套」、「範文」為基本結構的工具書形式。歷來一般的類書以天、地、人三才為主，彙集典故、詩文作為寫作指南，而「啟割類書」的分類型態則轉化成以人際交往為主軸，環繞著針對各種官宦的書簡往來、婚喪喜慶等人生大事，以及祝壽酬賀等。本文首先將就幾部宋元編纂的「啟割類書」探討其體製、編排、分類如何應用在人際交往，其次析論「啟割類書」之「書簡」所具備的多重社交功能，藉由類書展示宋元文人圈的文化素養與交際禮儀。

【VII-③】書簡與旅路—北宋文人的寄書、得書與留書

東華大学 張蜀蕙

宋人文集中留存的書信有關旅途所作，或道旅途，數量不多，彌足珍貴。旅路的風物人情，多見於詩歌，現實考察或見於行記。宋人文集中所見宋人書信，行道旅次瑣瑣，示人肺腑，多見於親友，在旅次、旅居不便的狀況之下，透過寄書、得書、留書，約期道中相見、或預

報道路情形。

如歐陽修赴夷陵，與陸經、薛公期、尹洙等人書信道「沿汴絕淮、泛大江、凡五千里，用一百一十程，…在路上無附書處」，卻頻頻作書，「苟更少留，猶得道中相見，奈何前後相失如此。」留書是訊息的探問與行程安排的確定，如梅堯臣至靈壁鎮於許供奉處得杜挺之書、得王安國留書。王安石與王逢原客中旅約期等候相見。書信裡敘舟船轉換，行程安排建議：「不知逢原此行以何時到江陰，今必與吳親同舟而濟，但到金陵莫須求客舟以往否，近制船難為謀。自金陵至潤，只一兩程，到潤則求舫至江陰亦易矣。」

蘇軾嶺外去來，留存的書信，與親朋書信贈答，可知當時如何安排連繫遠途旅路資養寄助，與家人與友朋書信消息，隨船舶寄達。〈與鄭嘉書〉：「為取一書，求瓊州海舶，或來人之便封題與瓊倅黃宣義託轉達。」北歸〈與秦少游書〉：「已有書託吳君履二十壯夫，來遞角場相等，…若得及見少游即大幸也。今有一書與唐君，內有兒書書託渠轉去。料舍弟已行矣。」黃庭堅集中簡尺兩卷，多類此。更為簡短。如「僦舟，極荷垂意，不要與爭數千錢，得大舟安穩，又速離得鄂州，是第一策。」「凡重物皆不將行」這些生活訊息，在窮途中，書信猶如閃爍不定的訊息，回應世界，與現實世界維繫的方式。

朝堂之外的江湖，書信是文人從邊緣世界發出的瓶中信，不啻是為我「存在」、「活著」、祈求幫助。文人書信裡心情的顯影坦露，難免因避禍而避禍而避言，使人揉去消毀，勿以示人。反倒是這些談及旅路現實生活瑣瑣書簡，即時應急的連繫，敘生活不及政事與議論而無害，這些書信因留存作者的字迹，不掩氣質，為人收錄。這些書簡，透露許多旅路的細節與作者心思，或許可以提供我們在紀行詩歌與行記之外，對作者旅程中另一種書寫近距離的觀看。

【VII-4】宋代の「書」再考—劉克莊の書信を手掛かりとして—

大阪公立大学 平田茂樹

宋代の書信には各種の形式が存在しているが、その中で最も多いのが「書」と「啓」である。「啓」が任官、赴任、昇進、科挙合格、致仕、誕生日などにおける儀礼的な挨拶状の特徴を有するのに対し、「書」は大別すると、公文書的性格を有するものと私的圏域の中で知人、友人間で様々なことについて意見交換をする私文書的なものの二類型が存在している。

「書」についてはこれまで幾人かの南宋士大夫の書信を通じて分析を試みてきたが、今回は劉克莊の書信を通じて以下のことを明らかにする。(1) 公文書と私文書の二つの性格を有する「書」の実態、(2) 「書」は単独で機能するわけではなく、もう一つの書信である「啓」、公文書である「申状」「奏状」「札子」などと連動して使われるものであり、その一連の使用過程、(3) 書信を通してみる南宋士大夫の多様な二者間関係、(4) 「書」からうかがえる南宋士大夫の集合的意識の4点である。以上の分析を通して、宋代の「書」の新たな特質を提示する。